
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 23

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 441.アメリカドラマと「文脈」について
- 442.才能や創造性に関する二つの研究アプローチ
- 443.卓越性と文脈: 文脈を見定める二つの眼
- 444.時空の交差と文脈
- 445.時間超越的な意識の中で
- 446.ベルグソンと時間の凝縮
- 447.独学と学び合い
- 448.生きた読書に向けて
- 449.言葉の自己展開
- 450.参禅開始
- 451.高みへ
- 452.物の奥行き
- 453.三位一体の調和関係
- 454.促しをもたらす文章
- 455.意味の玉手箱
- 456.ロバート・シーグラの「多重波モデル」
- 457.知識基盤のない脆弱な実践について
- 458.実践知について
- 459.光へ向かって
- 460.自己を研究対象とすることについて

441. アメリカドラマと「文脈」について

今朝、「タレントディベロップメントと創造性の発達」のクラスに向けて自宅を出発しようとする、ポストに郵便局からの通知が届いていた。

その通知書を見ると、荷物の受け取りに関して何やら私がどこかへ出向き、郵送費のようなものをこちらが負担することになっているかのようなようだった。アマゾンでの注文でこのようなことが起こったことは一度もない。

自宅を出発する時にこの通知書を見つけたので、辞書を引しながら記載されているオランダ語を理解する時間がなかった。そのため、教室に到着後、クラスメートであるオランダ人のジャーノとハンナに通知書を見せて内容を教えてもらった。

二人曰く、私が郵便局に出向いて記載されている金額を支払う必要があるとのことだった。二人の意見に従い、クラス終了後、記載された住所の郵便局に出向いた。事前情報のおかげで、オランダの郵便局は、日本でいう立派なものではなく、タバコ屋が郵便サービスを兼ねていたりすることを知っていた。

案の定、記載の郵便局なる場所に到着してみると、小さなコンビニのような店であった。店内に入り、店員に通知書を見せると、店の奥から届けられたものを持ってきてくれた。確かにその箱はアマゾンの記載があったのだが、こちらが何らかの費用を負担することはこれまでなかったため、品物のカテゴリーを確認すると、確かに私がアメリカから注文したドラマのDVDであることがわかった。

アマゾンでの注文でこちらから郵送費を支払ったことはないため、一応店員に確認してみると、何やら輸入税がかかるとのことだった。受け取った明細書に、今回支払った金額の詳細が書かれていた。帰宅後、辞書を引ながら明細書の意味を解読してみると、何やらEU諸国以外の国から品物を受け取る場合には関税がかかるということだった。

確かにイギリスのアマゾンから品物を注文した時には、このようにこちらから何か支払いをすることはかつてなかった。しかし、先日もアメリカドラマのBlu Rayをアマゾンから注文した時には、輸入税な

ど支払いをする必要はなかったので不可解である……。来週あたりにまたアメリカからBlu Rayが届くので、そのケースとこれまでのケースを合算して帰納法的にその理由を明らかにしておきたい。

DVDやBlu Rayで思い出したが、私は毎日夜の八時過ぎには全ての仕事をそこで止め、そこから必ずアメリカドラマを二話ほど視聴することが習慣になっている。アメリカ生活が三年目を迎えた頃、自分のリスニング力やスピーキング力が思ったほど向上していないことに気づき、それは毎日の生活において、英文を読むことや書くことしかしていないことに原因があると気づいたのだ。

それ以降、自分の関心に合致するアメリカドラマを選定し、それを毎日二話ほど視聴するようにしている。そうした習慣を数年続けることによって、ある時ふとリスニング力やスピーキング力が飛躍的に伸びたのを実感した。

ただし、昨年日本に滞在していた最初の三ヶ月間はこの習慣をやめてしまい、その後知人の米国人と会話をした時に、自分のリスニング力とスピーキング力が低下していることに気づき、それからまたこの習慣を継続し始めたのだ。

アメリカドラマを見ていていつも思うのが、その質の高さである。ヴィジュアル的にもストーリー的にも、優れたドラマが幾つも存在している。この数年間で印象に残っている作品は、何と言っても“Hannibal(邦題「ハンニバル」)”だろう。

この作品は、この二年間でシーズン3までを通して三回ほど繰り返し視聴した。人間精神の闇の側面や人間意識の改竄の容易性などが見て取れる傑作である。その他にもたくさんの優れたドラマと出会う幸運を得たが、あえてもう一つ挙げるとすると“Person of Interest(邦題「パーソン・オブ・インタレスト」)”である。

これは一週間前にファイナルシーズン(シーズン5)のBlu Rayが届き、一昨日から見始めたが、今週中には全て見終わってしまうのが残念なぐらいの作品だ。このように質の高いアメリカドラマを見始めると、日本のドラマの質の低さが否応なしに露呈されてしまうのだ。

関係者の方曰く、やはり制作費に関して、日本のドラマと米国のドラマとでは桁が違いうようで、あのくらいの質のものしか作れないそうだ。優れたアメリカドラマは、視聴者を物語の文脈に違和感なく巧みに一体化させるような力を持っているように思う。

簡単に言ってしまうと、作品にのめり込ませる力なのだが、そのように述べてしまうと少々乱暴であるため、優れたアメリカドラマには、目には見えない物語の文脈に視聴者を自然な形で組み込んでいくような力がある、と述べたい。

一方、日本の多くのドラマにはそうした力がなく、物語の文脈が露骨な形で浮き上がってしまっており、浮き上がった文脈の存在に気づいてしまうと白々しい匂いが立ち込めてくるのである。この匂いを嗅いでしまうと、もはや物語の文脈に自己を預ける気など起こりようがなく、視聴する意欲が失せてしまうのだ。

以前取り上げた「文脈把握力」の三段階構造において、文脈を客体化する力がなければ、そうした日本のドラマでもそこそこに楽しめてしまうのだと思う。一方、視聴者に文脈を客体化する能力があったとしても、作品の文脈に彼らを引き込めるのが優れたアメリカドラマの特徴だと思う。

もちろん、アメリカのドラマの質は高いものが多いのだが、アメリカのアニメーションのクオリティはとても低いように思う。逆に、日本のアニメーションは桁違いにクオリティが高いと感じており、この数年間で視聴したものは“Fullmetal Alchemist Brotherhood (邦題「鋼の錬金術師」)”と“Psycho-Pass (邦題「サイコパス」)”である。

“Fullmetal Alchemist”は全てのシーズンを通して三回ほど視聴したように思う。“Psycho-Pass”は二回ほど視聴したが、この作品の物語は、人間を科学的測定手法で評価することの限界を指摘しており、客観的な測定手法の使用手法と倫理的・道徳的判断の関係性などの哲学的なテーマについて考えさせられる内容になっている。

ストーリーの中で、主人公が何人かの哲学者の思想に言及する箇所があったり、幾つかのクラシック音楽の音響効果などもあり、それらが私を惹きつける要因になっていたのは間違いない。これらの作品は、ヴィジュアル的にもストーリー的にも非常に面白いものであった。こうした作品を見ると、

欧米のアニメーションの特にヴィジュアルの質の低さが歴然と感じられる。郵便局からの帰り道、届けられたDVDを抱えながらそのようなことを思った。

自宅に到着する間近、ある教会の前に差し掛かった時、七歳ぐらいのアフリカ系オランダ人の少年とすれ違った。少年とすれ違って道を右折してしばらく歩いていると、その少年と同年ぐらいの白人系オランダ人の子供が向こうから歩いてくるのが見えた。

すると、その少年の方から緊張した面持ちでオランダ語で私に話しかけてきたのだ。七歳ぐらいのこの子供が話した単語を全て知っているわけではなかったのだが、何を言わんとしているのか文脈から察知することができた。

どうやら先ほどのアフリカ系オランダ人の少年を探しているようなのだ。「オランダ語は少ししか話せない」ということをオランダ語でこの少年に伝え、「探している子は向こうの方に歩いて行ったよ」ということを英語で伝えた。

すると、その少年の表情は少し緩み、彼は英語で私にお礼を述べて、小走りで去って行った。私にとってはオランダ語が不自由であり、その少年にとっては英語が不自由であったため、お互いに共通言語がない状態であったにもかかわらず、互いに文脈を把握する力を駆使しながら双方の意味を理解し合っていたことは実に面白いと思った。

この一件から、「文脈」という意味とそれが持つ力、あるいは、それが私たちの認知世界に及ぼす影響について掘り下げて考えていく必要があると思わされた。

442. 才能や創造性に関する二つの研究アプローチ

昨日は、「タレントディベロップメントと創造性の発達」というコースの第五回目のクラスがあった。昨日のテーマは「教育における才能の発掘と支援」であり、ヘン德里アン・スティーンビー教授がこのクラスを担当した。

スティーンビー教授は、かつて私の論文アドバイザーであるクネン教授から博士論文の指導を受けていたという経緯がある。クネン教授から以前のミーティングでその話を伺っており、博士論文を

指導していた学生が、いつの間にか同僚として共同研究をするような関係になったことに対して、クネン教授は月日の経つ早さを感じているようだった。

スティーンビー教授は、ダイナミックシステムアプローチを実証的教育研究に適用している先駆者であり、彼女の関心事項は私のものと重なるところが多々あり、過去数年間において彼女の論文をあれこれと読んできた。

当時の自分からしてみれば、このようにスティーンビー教授から直接講義を受けられるとは思ってもみなかったため、特にクラスが開始する前に、感慨深い気持ちで満たされている自分がいたのである。今日の講義は、「教育の世界において「才能」とは一体どのようなものを指すのか？」というテーマを核に据え、「才能はどのように開発され、引き出されるのか？」「才能を引き出すことに関する先行研究」などを取り上げていった。

現在の私は成人教育に主な関心を置いているが、生涯にわたる発達を考えた場合、子供達の教育は極めて大きな意味を持っているため、子供の教育にも関心があるのは確かである。その関心度合いの強さを示すかのように、今日のクラスで取ったメモは、これまでのクラスで取ったメモよりも分量が圧倒的に多かった。

少し専門的な話になるが、才能や創造性に関する研究アプローチを大別すると「レトロスペクティブ・アプローチ (retrospective approach)」と「プロスペクティブ・アプローチ (prospective approach)」の二つがある。

今日のクラスでは、このトピックにそれほど時間が割かれているわけではなかったため、最終試験に取り上げられる可能性は極めて低いのだが、「卓越性の研究におけるレトロスペクティブ・アプローチとプロスペクティブ・アプローチの特徴を説明し、両者のメリットとデメリットを説明せよ」という設問を立て、それについて簡単に自分なりの考えを書き留めておきたい。

才能の特性や開花要因を解明する場合には、一つには過去に存在した特定の人物が経験した出来事に着目する方法がある。過去に存在した才能ある人物や、才能の開花に影響を及ぼしたであろう過去の原因に遡って研究する方法のことを「レトロスペクティブ・アプローチ」と呼ぶ。

例えば、モーツァルトという音楽的天才を研究するときに、モーツァルトは過去の人物であり、彼の活動記録などをもとに彼の音楽的才能を遡って探究していくことなどがある。具体的には、両親や家庭環境がモーツァルトの音楽的才能に与えた影響や当時の社会的な背景などを分析することを含め、残された文献を頼りに、モーツァルトの音楽的才能に影響を及ぼしたであろう要因を特定していくようなアプローチである。

この手法の主なメリットは、モーツァルトを取り巻く出来事はすでに起こったものであるから、これから起こる未来の要因などを考える必要なく、特定の出来事に焦点を絞って考察していくことができ、多数のサンプル数を確保したり対照群・実験群などを設定したりする必要がない、ということが挙げられるだろう。

一方、主なデメリットは、現存する資料からしかモーツァルトの音楽的才能にアプローチできないということである。仮に現存する資料に誤りがある場合には、考察の正確性を引き下げてしまう危険性がある。

それに対して、「プロスペクティブ・アプローチ」は、才能に影響を与える要因を仮説的に設定した上で、現在から将来にかけて、その要因が才能にどのような影響を及ぼすかを探究していくようなアプローチである。

例えば、音楽的才能に影響を与える要因を仮説的に「熟慮ある実践」と設定したのであれば、熟慮ある実践を行うグループとそうではないグループに分けてその効果を測定していくような方法がある。この手法のメリットは、先ほどのレトロスペクティブ・アプローチのような過去の資料から推測的に要因を解明していくのではなく、実際の実験を通じて要因を解明していけることにある。

また、現在から将来において才能がどのように開花していくのか、というプロセスを観察できることも大きなメリットである。そうした特性を考えると、ダイナミックシステムアプローチはプロスペクティブ・アプローチに分類される研究手法だろう。

一方、主なデメリットは、多数のサンプル数を確保したり対照群・実験群などを設定する必要があり、実験に時間がかかるということが挙げられる。確かに、ダイナミックシステムアプローチの主な特徴を考えると、それはプロスペクティブ・アプローチに分類されることになるだろう。

しかし、プロスペクティブ・アプローチのデメリットをダイナミックシステムアプローチは克服することが可能であると考えている。ダイナミックシステムアプローチは、応用数学をもとに数式モデルを立て、サンプル数が少なくても、コンピューター上で無数のシミュレーションを行えるという強みを持っている。

そのため、才能に影響を与える要因についてモデル化を行えば、無数のシミュレーションによって検証作業をすることが可能になるのである。また、シミュレーションの結果をもとにモデルを再検証し直すことが求められるため、シミュレーションを重ねれば重ねるだけ、モデルが洗練されていき、才能の開花要因に関するより正確な理論モデルを立証していくことが可能になる。まさに私の研究が採用しているのはこのようなアプローチである。

443.卓越性と文脈: 文脈を見定める二つの眼

ここ数日間は「文脈」というものについて色々と考えさせられることが多かった。「文脈」というのは、置かれている状況や環境のことを指すのだが、文脈が私たちに及ぼす影響は多岐にわたっており、それは非常に深い意味を持つ言葉なのだと最近特に痛感させられている。

カート・フィッシャーを含め、新ピアジェ派の研究者たちの功績は、私たちの知性や能力は置かれている文脈によって大きく変動するということを実証的に示したことにある。特にカート・フィッシャーの発達思想には、変動性を所与とする複雑性科学の影響が強く見て取れるのだ。

これは実際に、フィッシャーがダイナミックシステムアプローチを発達研究に適用した先駆的研究者のポール・ヴァン・ギアートから多大な影響を受けていることから明らかである。昨日の「教育における才能の発掘と支援」というクラスでも、文脈が私たちの才能や創造性を規定することが強調されていた。

昨日のクラスで視聴した一つの動画から、私たちの才能というものが顕現する際に、文脈がいかに大きな影響を与えるのかについてハッとさせられた。厳密には、文脈が才能に影響を与えるというよりも、文脈と才能は不可分の関係性を築いているのである。

この動画は、ワシントンDCの地下鉄駅で行われたある心理実験である。ジョシュア・ベルというアメリカのヴァイオリニストをご存知だろうか。この実験では、ラッシュアワー時の地下鉄駅の構内で、プロヴァイオリニストのジョシュア・ベルがみすばらしい格好に扮し、実際の公演で用いているヴァイオリンを使いながら、コンサートと同じ曲目を駅構内で演奏するというものである。

一時間に満たない時間ではあったが、その間に1,000人を超す通行人がいたものの、立ち止まって演奏を聴いたのはごく数人だったのだ。ベルの演奏は間違いなく名演だったのだが、それが地下鉄という文脈の中で生み出されたものである場合、ほとんどの人はその卓越性に気づかないということを示す実験であった。

この実験には様々な示唆が含まれていると個人的に思う。一つには、私たちの創造性や卓越性というものは特定の文脈の中で生み出されることによって初めて、存在意義や価値を見出されるということである。創造性や卓越性が文脈と切り離されてしまった場合、それはこの世界に存在しなかったものとして葬り去られてしまうのである。

もしかしたら、優れた才能がある時代で評価されないことが生じるのは、その才能が時代という大きな文脈と乖離しているからなのかもしれないと思われた。いかに優れた創造性や卓越性を持っていたとしても、文化や時代などの文脈とかけ離れたものである場合、それが正当に評価されることはなく、日の目を見ることがないままその人物は消えてしまうことになるだろう。

文化や時代という大きな文脈のみならず、この実験のように小さく文脈をずらすだけでも、私たちの創造性や卓越性は曇らされてしまうのである。日本語で「場違い」という言葉があるが、知性や能力を発揮する場を誤れば、真価を発揮することができず、正当に評価されることがなくなってしまうのだ。

ここから知性や能力の発達について考えた場合、私たちはどのような領域の知性や能力を涵養していくのかを選択するだけでなく、獲得された知性や能力を発揮する文脈を正しく選択する必要がある、ということが言えるのではないだろうか。

今のところ、知性や能力を涵養する場合、それがどの領域に立脚したものなのかを適切に把握している実践者はほとんどいないだろうし、ましてや獲得された知性や能力が真価を発揮する文脈が何であるかをわきまえている実践者はもっと稀な存在だろう。

自分が獲得した知性や能力がどの文脈で通用するかを見誤ってしまう場合、ラッシュアワーの地下鉄駅構内で名演を披露しながらも、誰からもその価値や有用性を認めてもらえなかった実験の中のベルのようになってしまいうだろう。実践者には、知性や能力を涵養する領域を見定める眼と共に、それらを発揮する文脈を見定める眼の双方が求められるということを教えられた実験であった。

444. 時空の交差と文脈

緯度の高いヨーロッパ地域に特有の、晴れの少ない冬に入りかけているのを感じている。そうした最中、朝一番の仕事を終えた後、ノーダープラントソン公園へランニングに出かけた。目を凝らして観察をしながら公園内を走っていると、前回のランニングとは違うわずかな変化を、公園内の自然から見て取ることができる。

公園という大きなくくりで見たとき、公園という存在そのものに変化はないのだが、公園内の自然に限定してみた場合、それは確かに変化しているのだ。ここから、文脈は入れ子構造になっており、一つ下の階層にある文脈内では多様な変化が起こっており、一つ上の階層にある文脈は比較的安定的なのではないかと思った。

そのようなことを思った瞬間に、先日読んでいたダイナミックシステム理論に関する書籍の中で、ダイナミックシステムは複数の階層構造を持っており、ある階層構造での変化が臨界点を迎えると、次の安定的な階層構造に移行する、という記述を見かけたのを思い出した。

静かに変化の歩みを進めている公園内の自然という文脈の中で、私は一定のペースで走りながらも、自分自身の中で起こっている変化の音に耳を傾けるかのようにランニングを続けていた。ランニングの帰り道、昨日通りかかった教会の前に差し掛かった時、昨晚出会った二人の少年との出来事が思い出された。

昨夜もこの一件から文脈について考えさせられていたのだ。文脈そのものに特定の記憶が紐付いているかのように、教会の前で私は昨日の出来事を回想していた。特定の記憶は特定の文脈の中に埋め込まれ、同一の文脈に自己が投げ込まれた時、その記憶が蘇ってくるのではないかと思わされるような状況であった。

文脈の入れ子構造の性質は実に複雑であり、どの文脈とどの文脈が階層構造になっているのか明確にできないものが無数に存在しており、時には複数の文脈が交差し合っているような場合もある。まさに時空が交差するかのように、昨日遭遇した少年たちとの小さな出来事を思い出していた。

すると突然、時間と空間がさらに飛躍し、この夏に訪れたパリのルーブル美術館での記憶に立ち戻っていたのだ。私がルーブル美術館の中で見た「モナリザ」に失望感を覚えたことは、以前の記事で言及していたように思う。

あの時の失望感を今になって振り返ってみると、やはり「モナリザ」という作品が、本来存在すべき文脈から切り離された形で展示されていたがために、あのような何とも言えない哀れさを感じさせたのだと思う。同時に、あのような形で展示されることによって、「モナリザ」という作品が本来持っている特質とは違う異様な個性を発していたのも事実である。

同じ絵画作品であるのに、それが置かれる場所によって発揮される特質が異なるというのは、まさに人間と同じだと思った。ルーブル美術館の「モナリザ」に関する記憶と紐づく形で、私の脳内に格納されているのは、スイスのニューシャテルで訪れたデュレンマツ美術館に関する記憶である。

この美術館がある土地は、作者のデュレンマツが実際の創作活動をしていた場所でもあり、彼が生活を営んでいた場所でもある。作者が生きた場所に展示されている作品は、どこか血の通った生き物であるかのようなみずみずしさを発しているように感じたのを今でも鮮明に覚えている。

文脈というのは無生物・生物を問わず、血を通わせることにもつながる一方で、血を抜き取ることに繋がりうるのだ。文脈が持つ力や性質というのは、まだまだ未知なものが多分に残されている。「文脈」という一つの言葉は、これからしばらく私の頭から離れることはないのかもしれない。2016/10/

夕食をとりながら、食卓の窓越しに黄金色をした木々が闇夜の中で揺れているのに気づいた。この光景を目にした時、今日も一日が終わりに近づいていることを実感した。

客観的な物質が、ある主観的な精神状態を喚起するということは注目に値することであり、そういえば自分の日記における客観的な情景描写が、いつの間にか主観的な思考や感情を導いていることが多々あることに気づく。

もう少し深くこのプロセスを見てみると、どうやら最初の段階から目には見えない思念や情念のようなものが私の中にあり、それらを心の奥底では最初から表現しようと思っているのだが、それらは輪郭しか持っていないため、客観的な物質や情景を描写することを通じて、輪郭に肉感を与えているのだということに気づいた。

客観世界を観察し、そこから喚起されるものを一旦言葉にすることによって、思念や情念がよりクリアな形となっていくのだ。このようなプロセスを見て取ると、どこからが客観世界で、どこからが主観世界なのかについて線引きをすることは極めて難しいことがわかる。

夕食後、一日の仕事内容を振り返ってみると、今日は昼食後の仮眠を経たのち、論文提案書のドラフトがほぼひと段落ついたことを嬉しく思う。来週の月曜日にクネン先生とのミーティングがあり、明日あたりにドラフトを先生に送っておこうと思う。

自分が今やるべき仕事や一生涯をかけてやり続けていく仕事は何なのかを、毎日どこかの時間帯で必ず考えるような日々が続いている。実際には、「考える」という能動的なものでは決してなく、なぜだか「考えさせられる」ことを迫られているのだ。

これは、フローニンゲンで流れる時間感覚と密接に関係しているような気がしている。今私がこの街の生活で感じている時間感覚は、もはやゆったりとしているというよりも、時間など初めからこの世界に存在していないのではないか、と思わせるような時間質を持っているのだ。

時間の流れを超越するとき、時間などそもそも流れていなかったのだ、ということに気づかされることも頻繁に起こる。未だ謎が残るのは、時間の流れを超越しているときに感じていた感覚は永続的なものではなく、日常の多くの時間は、時間の流れに乗っているという感覚を持っている点である。

やはり時間を超越している現象は、意識の状态的なものであり、それは永続的なものではなく一時的なものなのだろう。さらに観察を続けてわかったことは、一時的な現象に過ぎない時間超越的な状態に参入する頻度と長さは、この街で生活する日数を経るごとに増加しているということである。

意識の状態と意識の構造に関する古典的な原理は、高次の意識状態の経験量が臨界点を越えたとき、それは意識の構造として形作られうる、というものである。その原理から考えると、今の私は、時間超越的な意識状態が構造として顕現する方向に向かっているのだと思う。

さらに、こうした時間超越的な感覚の中で日々の仕事を進めていくことでしか見出せぬものや成し遂げられぬものがあることにも気づく。こうした感覚をもたらしてくれる環境の中で、日々の生活や仕事を営めることは非常に有り難いことである。

しかし、そうした特殊性に囚われないこと、そして特殊性から目を背けないことが重要だ。特殊性の中にあってそこでしか見えぬものや聞こえぬものに形を与え続けていくことは、自分に課せられた一つの重要な仕事だと思うのだ。

兎にも角にも、自分の中で形として表出したがっているものに形を与え続けていくこと以外に、今の自分ができることはないのかもしれない。

446.ベルグソンと時間の凝縮

今日からアンリ・ベルグソンの全集に取り掛かり始めた。全集をすでに所持していたにもかかわらず、昨年神保町の古書店で“Time and free will (1910)”と“Mind-energy (1920)”を購入した。

どちらも非常に古い書籍であり、前者に至っては、ページの所々にカビが生えており、独特な雰囲気放っているハードカバーである。ベルグソンの思想は一世を風靡した時期もありながら、科学者たちからは、彼の思想は推測的な実証性に乏しいものと見られていた時期もあったようである。

全集の方を最初に紐解くと、ベルグソンはウィリアム・ジェイムズ、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド、バートランド・ラッセルなどに多大な影響を与えていたことがわかる。私は自分の専門領域である知性や能力の発達において、人間の意識について探究することが必然的に要求されており、ウィリアム・ジェイムズから大きな影響を受けている。

また、近年の発達科学が発達現象のプロセスに重点を置いているという傾向も後押しし、プロセスとは何かについて探究する上で、ホワイトヘッドの「プロセス哲学」からも私は大きな影響を受けているのだ。私に影響を与えたジェイムズやホワイトヘッドは、ベルグソンから影響を受けていたことを知り、本腰を入れてベルグソンの哲学思想に足を踏み入れ始めたいと思うようになった。

本日ひょんな偶然から、「散逸構造論」を提唱したイリヤ・プリゴジンもベルグソンの「生の哲学」から影響を受けていたことを知った。複雑性科学を探究していく上で、プリゴジンの散逸構造論は必ずどこかで目にするものであり、ベルグソンの思想は複雑性科学とも大きなつながりがあるのではないかと思い、ますます全集を読む意欲が高まっていたのだ。

とりあえず、全集に掲載されている“Matter and memory”の論文を読み、その後、ハードカバーの“Mind-energy”と“Time and free will”の順番で読み、再び全集に戻ってくる形で仕事を進めていこうと思う。

そうした決心を固めたところで、再びフローニンゲンでの時間の感覚質について考えさせられていた。直感的な感覚だと、日本にいた時の一ヶ月がこちらの一週間に該当するかのような時間の凝縮性を確かに感じ取っている。

そのように密度が極めて濃い時間の流れの中に今の自分はいるのであるが、気を抜くと時間の凝縮性に押しつぶされそうになることがあるのも確かだ。だが、大変興味深いのは、自分のこれまでの知識や経験というものが、こうした凝縮的な時間感覚の中で、一つの統一的なまとまりになろうとしている現象が見て取れる。

つまり、時間の凝縮性によって、内側の知識や経験までもが凝縮されることによって一つの結晶体ができる、という意味である。ただし、そうしたことを可能にするのは、まさに「凝縮」という何かを圧縮

する力が働いているおかげであり、その力の前で自分を無防備に緩めてしまうと、自分の存在が押しつぶされてしまうのではないか、というような気づきをもたらされている。

同時にこの圧縮力は、内側の知識や経験を一つのまとまりに形作った後、それを再び展開させていくような力も同時に持っていることがわかる。圧縮する力と押し広げようとするような逆方向の力が同時に満たされているのが、フローニンゲンで私が感じている時間感覚だと言っても良いだろう。

内面世界で火山の爆発が起こるような事態というのは、圧縮する力と解放する力の双方が生み出す現象なのかもしれない。フローニンゲンの街に自分が辿り着いた本当の意味は、こうした現象を自分が通過するためだったのかもしれない。

人間の一生においてこうした体験をするのは、どれぐらいあるのか定かではない。そして、こうした体験をするために要する経験や時間の量もどれほどなのか定かではない。とにかく自分には、これまで生きてきた全ての経験と時間が必要だったとしか言いようがない。

窓から外の景色を眺めると、秋の深まる静かな風と共に今日という一日が終わりに近づいていることが一目でわかった。今日という日が終わりを遂げる時、間違いなく今日という自分も終わりを遂げるのだと了解した。

447.独学と学び合い

今日から本格的にフローニンゲンの街が冬に入ったことを実感した。外出する際には、もはや下にヒートテックを履いておかないと足元から冷えてくるのだ。同時に首元からも寒さが飛び込んでくるため、マフラーを巻いて外出する必要があるそうだ。

来週からは防寒対策をして外出しようと思う。今朝は残すところあとわずかのオランダ語のクラスに参加した。来週の火曜日がよいよ最終試験であり、13回のクラスがあつという間に過ぎ去ったように思う。

今回の初級コースを受講したおかげで、オランダ語による簡単なやり取りができるようになったことは大きな収穫であった。文脈は限られたものだが、スーパー、カフェ、レストランでの会話をオランダ語で行えるようになったことは実に大きい。

これらの文脈では、基本的にそれほど込み入ったやり取りがなされることはなく、会話のパターンというものがある程度決まっているのだ。そうしたパターンをしっかりと身につけ、あとは語彙を増やしていけば、それらの文脈内での会話をオランダ語で展開することはなんとか可能になるのだ。

こうしたコースに思い切って参加してみると、往々にして思わぬ収穫があるものである。当初このコースに参加する前は、13回のクラスを通じてどれほど自分がオランダ語を習得できるのか全く未知であったが、コースに飛び込み、カリキュラムに沿って継続的に学び続けていった結果、自分が想定していた以上の変化を実感することができたのだ。

他者と共に教師から学ぶことの意義を大いに実感させてくれる経験であった。やはり独学には限界があるので、語学にせよ学術的な内容にせよ、他者と共に学習を進めていくことの効果は大きい。

その点に関して、来期はオランダ語コースの時間帯の都合上、次のレベルのコースを受講できないのが残念である。オンラインコースの方も応募の締め切りが終わっており、来期中はオランダ語を自分のペースで進めていくしか方法がないようだ。

今回のオランダ語のコースから、独学と他者と共に学ぶことの違いについて少し考えさせられることがあった。ジョン・エフ・ケネディ大学の修士課程を修了して以降、私はおよそ三年間ほど独学で探究を進めていくことを余儀なくされていた。

文献の選択から文献の読み方やペースに至るまで、全て自分で決定し、自分が頭の中で漠然と立てた学習工程に沿って学びを深めていたように思う。もちろん、このような独学でしか深められないこともあるのは事実である。

特に、誰からも強制されることなく、自分の関心に沿って専門書や論文を読み進めることができたおかげで、専門知識に関する独特の幅と深さが得られたように思う。そう考えると、この三年間は意味のある孤独な修練期であった。

一方、こうした一人称的探求には固有の限界がある。一人称的探求の利点は、上述のように、自分の関心に沿って自分のペースで学びを深めていくことができるところにある。しかしながら、逆に言えば自分の関心に縛られてしまい、思わぬ盲点を生み出してしまうのだ。

現在、フローニンゲン大学のコースを受講することによって、自分の関心領域でありながらも見逃していた分野があることに気づかされている。社会人になってから再び大学院に通うことの利点は、これまでに獲得した知識や経験によって見えなくなっていた盲点に気づかせてくれ、探求の幅を広げてくれることが一つとしてあるだろう。

このように、外部から学習コンテンツを投げかけてもらうというのは三人称的探求方法に該当すると思うが、外から自分の盲点を照らし出されると、大抵ハッとするような発見があるものである。今の私は、このような発見の連続期に在ると言えそうである。

さらに、二人称的探求方法である、他者と共に学ぶということに関して言えば、今回のオランダ語のクラスでは、生身の人間と同じ時間と空間を共有しながらやり取りをすることの意義を改めて強く感じさせられることになった。そこには、独学での探求にはない特有の「緊張感」のようなものがあるのだ。

独学で学習を進めている時には、基本的には自分との対話だけで探究が進んでいくため、予測不可能な事態に遭遇することはそれほどない。しかし、他者と共に学習をしていると、予測不可能な事態が往々にして起こるのだ。

他のクラスメートが、自分にはない角度や視点から教師に質問することを受けて、これまで自分では湧いてこなかったそうした質問を自分に引きつけて考えてみることを余儀なくされることが多々ある。また、教師から自分に対して質問や意見を求められるというのも、予想されないタイミングでそれが起こるため、学習の間中、程よい緊張感が保たれているのである。

こうした緊張感は集中力を生み出し、学習効果を高めてくれるように思う。そして今回のオランダ語のコースでは、「失敗をする豊富な機会」があったことがとても重要だと思った。

語学の習熟度と失敗の数は何かしらの相関関係があると私は思っており、クラスの中でたくさんの失敗経験を積めたことは非常に大きかった。もちろん教師のリセットが、失敗を奨励する教室空間を巧みに生み出していたという功績がある。

また、他のクラスメートも積極的に発言をし、どんどん失敗を重ねるような行動を取っていたため、クラス全体として、語学の取得に不可欠な失敗経験を豊富に積むことができたように思う。要約すると、他者と共に学ぶことの中には、成長や発達に不可欠な「変動性」が潜んでいると思うのだ。

他のクラスメートが持つ独自の観点というのは、自分にとってはまさに予測不可能なものであり、それは自分の内側に変動性という波を生み出す。また、クラスの中で失敗をすることによって、学習曲線に瞬間的な退行現象がもたらされ、それは成長・発達に不可欠な変動性なのである。

今回のオランダ語のコースを通じて、独学と他者と共に学ぶということの双方の意義を再考させられ、これからは両者をうまく組み合わせながら探究を続けていきたいと思う。2016/10/14

448. 生きた読書に向けて

ここ数日間、読むことと書くことの比重について考えている。直近の三年間の私は、書くことよりも読むことの方に比重が置かれていたのは間違いない。実際に、一日中なんらかの専門書や論文を読み、文章を全く書かないという日が多々あった。

それぐらい、過去三年間は読むことに比重を置いており、文章を書くことはそれほど多くなかったように思う。三年間貪るように読書をした結果得られたものは何であったかという、それはよくわからないというのが正直なところだ。

もちろんそのように旺盛な読書体験を経たことによって、幾分自分の中の知識体系が拡張したように思うが、それは微々たるものであるように思うし、少なくともこの瞬間にはまだ形となって現れていないのだ。「書を読む」というのは、実は相当に奥の深い実践なのではないかと最近強く思われる。

読めているようで、全く読めていない。そのような経験をしたことはないだろうか。私はこうした経験をしょっちゅうしている。頻繁にそうした経験をしているというよりも、何かしらの専門書や論文を読むたびに、常にそうした経験に見舞われているといったほうが妥当だろう。

「読めている」という現象を、書き手の考えや意図に忠実になり、それらを正確に理解していることだとすると、それは相当に難しい芸当だと思う。私は他者の文章を読むたびに、常に自分の考えや意図が顔を出すのである。

そうしたことから、私は常に自分なりの考えや感情などを投影しながら他者の文章を読んでいることになる。「読めている」という上記の定義に従えば、こうした私の読み方は「読めていない」ことに該当するかもしれない。

しかし、果たしてそうなのだろうかと考えるようになっていく。そもそも上記の「読めている」という定義は修正の余地があると思うのだ。「読めている」という定義の中には、書き手の考えや意図を正確に理解して掴むということの他に、掴んだ内容に対して自分なりの考えを付け加える、ということも含める必要があるのではないかと思う。

というのも、書き手の考えや意図が文字の形で表された書物は、客観的な情報体であるが、その客観的な情報体に接する私たちは主観的な存在であり、外部の客観的情報に触れた瞬間に主観的な考えや感情が芽生えるというのは、実に正常なことのように思えるからである。

これは、先日紹介したように、身の回りにある何気ない物体や情景から主観的な思考や感情が誘発される、ということと密接に関係していることだと思う。私たちは、デカルト的二元論のように主客が分かれた世界に生きているわけではないのだ。

主客が不可分の世界に私たちは生きているがゆえに、客観的な書物という情報体に接した時、主体もそれに応じて動き出すのは必然のように思えるのだ。そのため、書物を読むということの中には、不可避免的に自分の考えを付け加えるという側面が内包されているように思える。

もちろん、主観的な考えを挿入する前に、著者が述べている内容を適切に掴むことが要求されるが、そうした要求に従うだけでは書物を読んだことにはならないのだと反省させられる。読書というのは、

私たちが思っている以上に能動的な営みであり、著者の考えを受けてどのような考えを自分なりに作り出していくのが必然的に求められているのだ。

ここからさらに、昨夜面白いことに気づいた。昨日読んでいたベルグソンの全集や発達科学の優れた論文が集められた“Change and development: Issues of theory, method, and application (1997)”を振り返ってみると、自分が一日の間に「生きた読書」と「死んだ読書」という二つの種類の読書を行っていたことに気づかされたのだ。

「生きた読書」というのは文字どおり、著者と読み手である私があたかもその場で対話を行っているかのように、著者の文章によって私の内側が触発され、文章を読むことによって自分なりの考えや感情などが芽生えていく、というような書物との向き合い方である。

一方、「死んだ読書」というのは、字面を目では追っているものの、その内容によって一切こちら側が触発されず、文章を読むことによって、結局自分の中から何も生み出されないような体験を伴う書物との向き合い方である。

そして重要なのは、「死んだ読書」によって仮に書物で書かれた内容が頭に残っていたとしても、それは間違いなく「死んだ知識」である。後日、それを取り出そうとしても、往々にしてうまく取り出せないだろうし、実践の場で活用しようと思っても、活用に足るだけの情報エネルギーを内に秘めていないのだ。

一方、「生きた読書」で得られた知識というのは、それが自分の内側を一旦通過しているがゆえに血の通ったものであり、生き物のように多様な文脈に適応するような力を発揮することができる。つまり、そのようにして獲得された知識には、多様な文脈でそれを活用する実践力が備わっているのである。

自分が「生きた読書」を行っているのか、「死んだ読書」を行っているのかの違いを感じ取れるようになってきているため、あとはいかにして全ての読書行為を「生きた読書」に変えていくのかの方法を自分なりに打ち立てていくことにあると思う。二つの読書行為の差をより明確にするために、しばらくは書物や論文との向かい方を毎日モニターしていく必要があるだろう。

オランダ語のクラスから帰宅後、最終試験に向けての総復習を簡単に行っていた。その後、研究プロジェクトを少しばかり前に進めるような仕事に取りかかっていた。

夕方の仕事がひと段落したところで風呂に入った。毎日、浴槽に浸っている時は至福の時間であり、身も心も非常にリラックスした状態に自分がいることに気づく。浴槽から出た後に書斎に戻ると、大抵何か新しい考えが、自分の思考の海の中の表層に浮上していることがわかる。

そうして浮上してきたものを毎日逃さず掴み続けるというのも、日々欠かさずに行っていることかもしれない。夕方に読書について文章を書いていたのを思い出す。浴槽から出た後に気づいたのは、「生きた読書」の最中では、著者の言葉に触発されて、自分の内側で新たな言葉が芽生えていくような現象が起こっていることに気づく。

「発達(development)」という言葉の語源は、フランス語の“desvolper”であり、それは「開く(拓く)」という意味を持っていることを以前紹介したように思う。自分の中で読書体験が活性的なものである場合、まさに「言葉が開く」というような現象が内側に生じていることがわかるのだ。

生きた読書体験の中では、著者の言葉が引き金となり、私の言葉が自分の足取りで自己展開を進めていくのである。実際に時折見られる例としては、本文中の一行に刺激され、自分の内側で自己展開する思考や感情と向き合ってそれらを文章の形に言語化していると、気がつくとその一行しか読み進めぬままその日が終わることもある。

以前は、一行しか読み進めることができなかったという事実には焦点が当てられていなかったため、有意義な読書体験を得ることができなかったと思いがちな自分がいたのだ。しかしながら、それは逆に、非常に有意義な読書体験だったのではないか、と思い直すようになっている。こうした思考の転換が起こったのもまさに、読書体験の意味や捉え方が自分の中で変化したからだろう。

自分が能動的かつ躍動的な「生きた読書」を行っているかどうかの基準は、書くことと密接に関係しているのだと思う。書籍や論文を読み、それに対して自分の内側で湧き上がるものを言語化させたかどうかはその基準があると言っても過言ではない。

つまり、読んで書き、読んで書きというサイクルが回っているかが鍵なのだ。読んで読み、読んで読みというサイクルは、死んだ読書体験の中で生じるものだと思う。そう考えると、やはり今の自分の文章量は圧倒的に不足していると言わざるをえない。

自分が犯しがちな過ちは、読書の最中に自分の内側でザワザワするものがあるにもかかわらず、それを押しとどめて読書を進めようとするることである。つまり、せっかく読書が引き金となって、自分の内側で言語化を待っているものが表出してきたにもかかわらず、私はそれを無視していることがあるのだ。

これは言い換えると、自己展開の切断であり、そうした状況では自分の中で何も深まることはないのだ。自己展開を望んでいる自分の内的な感覚や言葉を逃さず捉え、それらを自発的な運動に導くことが私に求められていることなのかもしれない。

そうした導きを可能にする一つの手だてが、やはり文章を書くということなのだと思う。読むことを起点に据えるのではなく、書くことを起点に据えていく態度が自分に求められている。書く量が圧倒的に足りていないことを痛感させられる毎日である。

今の私には、文章を書くという強い渴望感があるようだ。こうした渴望感もまさに自己展開しようと志す内的感覚の一種であり、それを殺さず自発的な自己展開の波に乗せていくことが大事だ。

鬱蒼としたフローニンゲンの夜空の雲間から、かすかな太陽光が依然として残っていることに気づいた。太陽は太陽として回っている。ここにも自己展開の力が宿っているようだ。

450. 参禅開始

コンサルティングサービスを含め、どこかの企業と関係を持つ際には、必ず有価証券報告書を眺め、財務分析や企業価値評価のようなことを行ってしまう自分が未だにいる。これは大学の学部時代の専攻の影響が、まだ私の中で色濃く残っていることを示している。

もしかすると、そうした過去の専攻の影響というよりも、そもそも企業経営のような外面的な現象を、客観的指標を用いて眺めることを好むというのは、拭い去ることのできない自分の性分の一つなのかもしれないと思った。

実際のところ、財務分析や企業価値評価という類のことからは足を洗ったと思っていたのだが、そもそも自分の根元部分には、客観的な指標を用いて外部現象を眺めることを欲する感情が渦巻いているのかもしれない。

そう考えると、ひょっとして自分はこの五年半という歳月において、人間の内面領域の探究など一切行えていなかったのかもしれないと思われた。厳密には、今から六年半ほど前に、外側の事象を外側から眺めることはもうやめようと思って日本を離れる決意をしたのだ。

当時の私は、企業活動という外面領域に該当する現象と日々向き合っていた。そうした最中、人間の心や意識という内面領域の探究に舵を切ろうと思って米国に渡った。確かに、当時の私は、人間という存在を脳科学や認知科学などのように外側から捉えるようなことに関心を持っていたわけではなかった。

実際に私が関心を持ったのは、構造的発達心理学という領域であった。しかし、ここに少しばかり落とし穴があったことに、今頃になってようやく気付いたのだ。構造的発達心理学というのは、確かに人間の知性や能力という内面領域に該当する現象を扱う。

しかしながら、結局そこで採用される探究アプローチは、人間の知性や能力を外側から眺めるということにあるのだ。要するに、これまでの私は人間の知性や能力の内側で起こっている生々しい事象を外側から捉えることしか行っておらず、それらの内側の現象を内側から捉えるということを怠っていたのである。

まさにアメリカの思想家ケン・ウィルバーのモデルを採用すれば、これまでの私は「ゾーン2」の世界から人間の知性や能力を捉えようとしており、「ゾーン1」という内面領域を内側から把握するというアプローチが圧倒的に欠けていたのである。まさにそのツケを今払っているような気がするのだ。

毎日、毎日、自分の内側で起こる現象に目を配り耳を傾けながら、何が自分の内側で起こっているのかを把握せずにはいられないという衝動に駆られているのだ。そうした衝動はまさに、過去五年半にわたって、そうした実践が私の中で決定的に欠けていたからなのではないかと思うのだ。

仮に、自分の内面領域を内側から把握する試みを「自己探求」と呼ぶのであれば、私の自己探求はオランダに渡ることを契機としてようやく始まったと言っても過言ではない。「自己探求に終わりはない」という言葉をよく聞くが、私に限ってみれば、私は一度も自己探求などしていなかったのではないかと自分を押しつぶすような猛省をしている。私はここから自己探求を始めていかなければならない。

昨夜就寝前、「文章を書かないのであればそれは自分の生に値しない」という極めて極端な言葉を発している自分が内側から顔を出した。その自分の言葉はひどく偏ったものであるが、改めて翻訳するならば、「内側で躍動する生の流れを絶えず感じながら、それが外側の世界でも生きれるように形を与えないのであれば、それは本当の生を生きていることにならない」というような意味なのだと思う。

とにかく今の自分は、産道からこの世界に何としてでも生まれ出ようとする胎児のように、内側のものを外側に表出させようとする、いわば生命力の根源のようなものに包まれている気がしている。

そしてこうした根源的なエネルギーは、人間の欲望とも密接に関わっており、今の自分にはある種、内側の思念や情念に言葉を与え、何としてでもそれを掴みながら外側へ押し出すという欲望を持っているのかもしれない。こうした欲望は私の中の最後の障壁として今目の前に立ちはだかっている。

何気なく眺めていた有価証券報告書が起点となり、そのようなことを思わされた。この五年半の時間は何だったのかと思わされるが、上記のことに気づかされるのにそれぐらいの時間が私には必要だったのだ。ここから真の意味で、自分の内側を探っていくという実践をしていかなければならない。

今日というこの瞬間から参禅がようやく始まったかのような感覚だ。参禅を行うことが難しいというよりも、そもそも参禅を始めることが極めて難しいのだ、と思わされる瞬間であった。

昨夜は就寝前に、何気なく書斎の本棚を眺めていた。本棚をぼんやりと眺めているだけでも、いつも何かしらの発見があるものである。特に、本の背表紙には、書籍の中身を喚起するような力があるように思えて仕方ない。

そのように喚起されたものに応じて、こちら側の内側でも何かが喚起される。本棚の本から喚起されるものと私の内側で喚起されるものが共鳴した時、その本を手にとってみるという動作が生じる。

そのようにして手に取ったのは、ブラッドフォード・ワラックという哲学者が執筆した“The epochal nature of process in Whitehead’s metaphysics (1981)”だった。この本では、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの哲学に対する解釈を見直すことが試みられており、ホワイトヘッド哲学の重要概念である「現実的存在(活動的存在)」を中心に、「抱握 (prehension)」「プロセス」という用語の再解釈が試みられている。

人間の発達現象を探究していく際に、発達のプロセスを観察していくことが重要であると以前紹介したように思う。そのため、本書の中でも特に「プロセス」という用語を詳細に論述した章は、時間をかけてじっくり読もうと思う。

ここ二日間連続して不可解な夢を見ている。双方の夢に現れた現象を解釈すると、どちらの夢にも「高さ」を象徴するようなシンボルが現れている。それらのシンボルが持つ意味を改めて考えてみると、やはり自分は何らかの高みに向かって突き進もうとしていることがわかる。

覚醒状態でいくらそれを誤魔化したり抑制しようとしたりしても、それはほぼ無意味であり、私の無意識の領域で高みへと至らせようとする内在的な運動が行われているようなのだ。夢の中の自分を観察してみると、自分が望むような高みに至れずにもどかしさを抱えているような姿が見受けられる。

そうしたもどかしさを抱えている自分の気持ちの中に入ってみると、実は彼が潜在的にはより高みへ至れることを感じているようなのだ。しかしながら、高みへ飛翔する力の使い方というものを理解していないようであるし、何よりも、高みへ至ることを恐れているような心境があるのが見て取れる。

私の夢の中で頻繁に現れるシンボルは、空中を飛ぶという行為である。昨夜の夢の中で空を舞っているときにも、必ず地上が見える位置を保っている自分がいた。夢の中の自分は、より高いところを飛べることを知っているのだが、それよりも高度を上げることを相当に躊躇しているようであった。

この夢が何を意味しているのか、そして何を自分に伝えようとしているのかは、今の自分には痛いほどよくわかる。夢というのは、仮に記憶の合成であったとしても、その合成物は今の自分の心境によって変幻自在に姿を変えるという特徴を持っているように思う。

そうしたことから、夢は今の自分が抱えている課題を的確に言い当てることのできる、現実世界の真実以上の真実を内包しているように思える。

より高い場所を飛ばうしてもがいている自分を見ながら夢から醒めた。目を開ける前に耳に飛び込んできたのは、朝方の激しい雨音であった。

起床前の早朝にこのような激しい雨が降ったことは、こちらに来て初めてのことだった。昨夜の夢の感覚は、激しい雨によって流されることなく未だ自分の中に残っている。

高みへ至ることを希求しながらもがく自分と、高みへ至ることを恐れる自分を抱えながら、今日の仕事に着手することにした。

452.物の奥行き

本日は、激しい雨が通り過ぎ去った後の土曜日である。やはり仕事は複数あると、当然ながら優先順位というものがある。休日に取り組む仕事は、平日には取り組めないようなものの中で、自分が最も意欲的に取り組みたいと望むものを選ぶようにしている。

今日の午前中は、新オンラインゼミナールの教材作成の合間合間にオランダ語の最終試験へ向けた学習を行っていた。以前紹介したように、期末にこのような大きなテストがあることによって、これまでの学習内容を振り返る絶好の機会になる。

実際に試験に向けて復習を進めていく中で、習ったはずの知識に漏れがあったり、理解が不十分である箇所に気づくことができる。午前と午後の仕事がある程度落ち着いたところで、ふと昨日と同様のテーマについて考えていた。

昨日は「生きた読書」について考えることを迫られていた。今日はほとんど特定の文献をじっくりと読む時間がなかったのだが、それでもホワイトヘッドの哲学に関する書籍を読み進めていた。それでは果たして、今日の自分の読書が「生きた読書」だったのかと問われると、いささか疑問が残る。

昨日は、「生きた読書」に関する特徴を列挙するところで思考が終わり、どのようにすればそのような読書体験を積めるのかに関しては一切踏み込んでいなかった。そうした影響からか、ホワイトヘッドの哲学に関する本日の読書から何かを得られたかという、それほど大きなことはなかったように思う。

ノートに書き留められたメモもごくわずかであり、そこから自分の思考や感情が自己展開を始めることはほとんどなかったのだ。ただし、非常に難しいのは、果たして今日の読書が不活発なものであったかという、それに対しても疑問が残るのだ。

確かに、今日の読書によって自分の内側で何も自己展開することがなかったため、表面上、それは「死んだ読書」の特徴に合致するように思える。しかしながら、ノートに残されたメモが時間という流れの中で濾過された結果、ある時ふとそのメモを起点として、私の内側で何かが自己展開する可能性が残されているようにも思えるのだ。

読書体験から内発的な自己展開が生じるためには、やはり対象と真剣に向き合うことが求められるのかもしれない。私の場合、往々にして、書籍を一読するだけでは内容を理解できない。繰り返し繰り返し読むことによって、内容の理解が徐々に深まっていき、同時に自己展開が生じるように思える。

同じ書物を繰り返し読むというのは、対象と真剣に向き合っている一つの証だと思う。ここから再読を通じて書物と真剣に向き合うことによって、思考や感情が開いていくということが起こりうるように思うのだ。

一方、書物を一読するときにも、どこかに必ず自分の目を引く箇所が存在しているため、その箇所に遭遇した時は、何食わぬ顔で通過するのではなく、そこで立ち止まり、該当箇所の前後を繰り返し読んでみるのが重要なかもしれない。一つの文章や一つの段落と真剣に向き合い、繰り返し読むことによって、何かが動き始めるのを感じる事が頻繁にあるのだ。

どうやら対象物には、肉体の目には見えない奥行きのようなものがあるようだ。今日は限られた時間の中で単発的に複数の資料を読むことになったが、それらは同じ活字体であるにもかかわらず、奥行きが全く違うことに気づかされる。

それぞれに異なる意味が梱包されており、それらの意味にはまた別々の幅と深さが凝縮されている。その凝縮を開く作業は読み手に委ねられるが、私としては、自分にとって重要な意味が梱包された文章を的確に掴むような感覚が欲しい。

こうした感覚を高めていくためには、やはり今の自分が何に関心を持っているのかを明確にしておく必要があるように思う。その点が曇っていると、書物から自分にとって真に重要な意味を発見することができなくなってしまうだろう。

そう考えると、絶えず自分の関心を書き留めておくという作業は、一つ大きな役割を果たすように思う。このようなことを考えさせられた契機として、本日目を通していたホワイトヘッドに関する哲学書が間接的な役割を担っていたのかもしれない。ホワイトヘッドの哲学書から得られたのは、内容的なものではなく、このような考えに至らせてくれた運動だったのだ。そのため、今日の読書も生きた読書だったと呼べるかもしれない。

453.三位一体の調和関係

今日も一日が静かに終わろうとしている。相変わらず観想的な生活リズムが刻まれている。このリズムは、とても独特な音楽的なものだと形容していいかもしれない。

そうした生活をする中でも、あるいはそうした生活をしているからこそ、自分がどのように生きていくのかについて絶えず考えさせられている。自分はどうして母国を離れて、毎日毎日このような生活を刻み続けているのかについて考えさせられるのだ。

こうした観想的な生活を送る中で学んだことは、自分が諸々の探究を進めていく中で、外界の対象物に対して敬意を持つことの意味に気付いたことだろう。外界の対象物には無限の奥行きがあるのだ。

重層的な奥行きの一つ一つをこの目で確かめていくためには、一步一步の内側の成熟が求められる。なぜなら、外界の対象物が目に見えない形で内包している意味というのは、それを見る私たちの内側の成熟に応じて徐々に開示されるものだからだ。

言い換えると、内側の成熟に対応する形で、対象物はその奥行きをこちらに開示してくれるのだ。なぜだかこうした観想的な日々の中では、私を取り巻く何気ない対象物から学ばされることが多々あるのだ。

それは空の場合もあれば鳥の場合もある。書物の場合もあれば食物の場合もある。このように自分を取り巻く無数の対象物には、必ず重層的な奥行きが隠されており、自分の内側の成熟に応じて開示されるものが異なってくるのだ。

これは目に見える客観的な対象物のみならず、文化や組織といったものにも当てはまることだと思う。私自身、日本の文化から見える事柄というのは、この数年間で大きく変貌したように思う。

それはひとえに、自分の内側の成熟というものがあったからだろう。そして、組織といったものを考える際にも、自分の内側の成熟度合いに応じて開示されるものが全く異なると思うのだ。

仮に自分が何らかの組織に所属している場合、あるいは外部から組織を見る立場にある場合、自分が組織という対象物から何を汲み取るのかに関して、過去の自分と試しに比較してみると良いかもしれない。仮に自分の内側で成熟という現象が起こっていたのであれば、そこから汲み取れる意味というのは、必ず以前のものとは異なっているはずである。

さらには、外界の目に見える対象物や文化や組織といったもののみならず、当然ながら自分を対象にした場合にも同様のことが当てはまる。つまり、自分の内側の成熟に応じて、自分という対象物から得られる気づきが姿を変えるのである。

内面の成熟を経ることによって、自分の思わぬ側面に気づくことができたり、これまでの気づきからさらに一步深い気づきが得られるような経験をしたことがある人も多いだろう。このように考えると、どのように生きていくのかに関する問いに対して、内外の対象物に対する敬意を通して自己を深めていくことの中に、一つ大きな鍵がありそうなのだ。

内外の対象物に真に敬意を表するためには、それらが内包する重層的な意味を掴むための自己の成熟が求められる。一方、自己を深めていくためには、内外の対象物の存在が不可欠なのだ。

内と外の現象と自己の成熟は三位一体のものなのだろう。三位一体の調和関係を忘れずに生きることが、今の自分にとって極めて重要なものに映って仕方がない。

454. 促しをもたらす文章

昨日の夕方面白いことに気づいた。書物を読むことに関してあれこれ考えていると、自分の内側に自己展開を促す書物の新たな特徴が浮かび上がってきたのだ。

フローニンゲンの街に到着してから二ヶ月半が経つが、かろうじて毎週末に日本語を読むという実践が継続している。土日の両日に日本語の文献を読めるとは限らないのだが、どちらか一方の日は何かしらの日本語に目を通すようにしている。

日本語の本といっても、オランダに持ってきたものはせいぜい森有正先生、辻邦生先生、井筒俊彦先生の全集ぐらいしかいないのだが、彼らの文章からはいつも大いに励まされるものがある。昨日は森有正先生の「城門のかたわらにて」を数ページほど読む時間を取ることができた。

この文章は、今からおおよそ60年前に執筆されたものである。森先生の文章を読みながら改めて気づいたことは、書き手が読者を強く意識した文章というのはいかにつまらないかということだ。つまらない文章とは、それを読んでいる最中や読了後に、自分の中で何も動くものがない文章を指す。

確かに文章を書くという行為には、少なからず読者が想定されている。ましてや世間に広く流通するような書籍の形態をとる場合、なおさら読者を想定することは大切なかもしれない。

しかしながら、書き手が読者を意識しすぎた文章というのは、非常に味気ないものに映るのだ。読者に言葉を寄せようとした瞬間に、書き手の中の大切なものが消失してしまうような感覚である。

昨年から今後数年にかけて、私は上記三名以外の日本語を読むことはほとんどないと思う。手に入る和書の中で、自分を真に動かしてくれるものはそれくらい少ないと実感している。

往々にして多くの文章は、読み手を意識するという意図が仇となって、読み手を真に動かす力が骨抜きになっているような気がするのだ。昨日目を通していた文章の執筆者である森先生は、少なくとも60年後の読者である私に向けて文章など書いていない。

さらに、そこで書かれているのは、森先生の単なる独白とも取れるかもしれないような内容なのだ。しかし、森先生の文章が私を大きく突き動かしていることはまぎれもない事実である。

こうしたことから、読むことと同様に、書くことも固有の難しさを内に秘めているように思う。世間一般には、読み手を意識した表現で文章が執筆されることが奨励されているが、それは公的文章などの外面記述を要求されるような文章にのみ適用するべきであり、内面記述を意図した文章には決して当てはまるような原則ではないと思うのだ。

内面記述を志した文章にそのような原則を当てはめてしまった瞬間に、大切なものが確実に抜け落ちていくのを実感している。そのようにして出来上がった文章は、臭みがない味気のないチーズであり、トゲがない刺激のないバラのようである。

昨日の森先生の文章の中には、臭さや痛さがありのままに内包されていたがために、自分の内側を動かす何かがあったのだろう。今の自分はそのような文章しか読むことができないし、そのような文章にしか価値を見出すことができない。

455. 意味の玉手箱

非常に滑稽なことが起こった。例のホワイトヘッドの哲学に関する専門書を70ページほど読み進めた結果、自分がノートにメモを取ったのは、「全ての実体は非線形的な変化を遂げる」という記述だ

けであって、その具体例として「人は同じ川を渡ることは二度とない」「人は同じ事柄を考えることは二度とない」「主体として同じ経験をすることは二度とない」ということがノートにメモされている。

これらは複雑性科学の領域において前提となっている事柄であり、他の哲学者も同様のことを述べているため、知識として目新しいことなどほとんどないのだ。しかしそれにもかかわらず、私はこれらの事柄をメモしていたのである。

どうやらこれらの事柄が意味する内容は、私が思っている以上に奥深いのかもしれない。今の私は直感的に、後々これらの事柄が、思わぬ意味を私の眼前に開示させてくれることを把握していたかのように思われる。

ホワイトヘッドのそれらの考え方はまるで、目には見えない重層的な意味が梱包された玉手箱のように映る。今回の読書体験では、私はホワイトヘッドのそれらの言葉が持つさらに一步深い意味を紐解くことに向かわなかった。

いや、もしかしたら向かえなかったのかもしれない。とにかく私にとって重要なことは、ある事柄が仮に既知だと思われたとしても、何か引っかかることがごくわずかでもあったのであれば、それを書き留めておくことにある。

「それはすでに知っている」という態度で、ある知識と接する光景を頻繁に目にするが、そうした態度ではその知識が内包しているさらに深い意味を発見することができなくなってしまうだろう。意味というのは無限に重層的なものなのだ。

ある知識をそれがすでに既知であるとして邪険に扱う態度は残念で仕方ない。自分が掴んだと思っただけの意味の下には、さらに深い意味が隠されているという真実に気付く必要がある。そのようなことを今回の読書体験から学ばされた。

わずか数行のメモしか残すことができず、一見すると自分の内側で自己展開が起らなかった今回の読書体験は、実は非常に充実したものが隠されていたのかもしれないと思った。今日の読書では、自分がすでに知っていると思われた箇所をあえて抜き出すことを行っていたのだ。

そして、抜き出した箇所から何か思考を深めていくというようなことを行ったわけでもなく、それはさながら玉手箱を発見しながらも、それを開けないままどこかに大事にしまっておいたような行為に似ている。

もしかすると、重層的な意味が梱包された玉手箱を常に開封する必要はなく、玉手箱の存在を明らかにしておくだけでも読書の意味はあるのかもしれないと感じた。今回のメモを見返すと、どうも今の自分では、それより先に存在する一段深い意味を発見しに行くことは時期尚早であり、より深い意味を掴むためには自分のさらなる成熟が必要なのだと思う。

456. ロバート・シーグラーの「多重波モデル」

今日は何と気温が10度後半に達するという極めて暖かい日になるそう。日曜日にこうした気温になるのは有り難く、朝の仕事を終えたらランニングに出かけようと思う。

起床から一時間ほど仕事をした後に、書斎の窓から外の景色を眺めた。すると、空が朝の太陽に薄赤く照らされていた。空に浮かぶ雲も同様の恩恵を受けて、薄赤く照らされている。

今この瞬間の私の目の前には、なんとも形容できない美が顕現されている。薄赤く照らされた雲は、とてもゆっくりとした速度でかすかに動いているのがわかった。その様子に目を凝らしていると、それらの雲は、空という大海の中で波のような役割を果たしているように思えた。

数多くの波が静かに進行していく様子には、思わず息を呑むものがある。太陽に礼拝を捧げることや空を仰ぎ見ることの意味と意義を実感せざるをえない。

昨日は、カーネギーメロン大学教授ロバート・シーグラーという発達科学者の論文“Concepts and methods for studying cognitive change (1997)”に目を通していた。おそらく過去どこかで、シーグラーについて言及したことがあるかもしれないが、新ピアジェ派以降の発達研究において彼の功績を忘れるわけにはいかない。

シーグラーは、カート・フィッシャーやポール・ヴァン・ギアートと同様に、発達のプロセスを研究することの意義を強調した研究者である。ピアジェ派や新ピアジェ派の発達研究では、どうしても発達現

象の始点と終点を比較するようなものが多く、始点と終点の間で起こっている微細な発達現象を捉えることがあまり着目されていなかった。

厳密には、そうした始点と終点の間で起こっているプロセスが着目されていなかったというよりも、当時の発達研究の方法論では、そうした発達プロセスに迫っていくことができなかったというのが実情である。このような方法論的な限界をピアジェ派や新ピアジェ派は抱えていたために、発達のプロセスをつぶさに観察することができなかったと言える。

その結果として、ピアジェ派やロビー・ケースのような新ピアジェ派は、発達現象を階段のようなものとして捉えるようになったのだ。ピアジェ派や新ピアジェ派が抱える方法論的な限界に気づいたシーグラールは、微細な発達現象を捉えていく方法論を確立し、非常に重要な発見をした。

その発見事項が結実したものがまさに彼の「多重波モデル」である。簡単に述べると、シーグラールは発達現象を階段状に捉えたのではなく、幾十にも重なる波のような現象と捉えたのである。実際にシーグラールは、様々なレベルを持った複数の能力が、あるタスクに対して発揮され、それらのレベルや能力の種類が波の移り変わりのように変動することを実証的に明らかにしたのだ。

彼の多重波モデルでもう一つ重要なのは、発達に伴う大いなる飛躍の捉え方に新しい解釈を施したことである。ピアジェ派や新ピアジェ派の考え方では、発達に伴う大いなる飛躍は段階を移行するときにはしか見られないとされていた。

まさに、ある段階から次の段階に移行するときのみ、段階が跳躍すると捉えていたのである。しかしながら、シーグラールのように発達のプロセスをつぶさに観察してみると、私たちの知性や能力は、段階の移行の時にだけ大いなる飛躍を遂げているのではないことがわかるのだ。

つまり、重大な変化は継続的に起こっているものなのだ。今この文章を書いている私の中でも、大きな変動が内側で起きているのだ。ただしそれらの変動は、寄せては帰る波のようなものであり、注意深く観察をしてみないと、内側でそのような動的な変化が起こっているとは感じられないのだと思う。そのようなことをシーグラールの論文から考えさせられた。

仕事の手を止めて再び窓の外を見ると、薄赤く照らされた雲はもうどこかに行ってしまった。空全体が朝の太陽に黄色く照らされ、フローニンゲンの街全体が活動に向けた息吹を発している。今日という一日が、また静かに始まるのを実感した。2016/10/16

457. 知識基盤のない脆弱な実践について

秋が終わることを祝してなのか、冬が始まることを祝してなのか、今日は暖かい日曜日であった。それもあって、早朝の仕事を終えてランニングに出かけた。今日のランニングは、いつものようにノーダープラントソン公園へ行くのではなく、以前発見したサイクリングロードを走ることにした。

これまでと同じコースを走りながら景色を眺めていると、あるところでふとコースを変えようと思い立った。そうした考えに至らせたのは、視界に飛び込んできた閑静な住宅地であった。住宅地の方へコースを変えると、サイクリングロードとは違う空間がそこに広がっていた。

秋晴れの中、一軒一軒の住宅が個性的な輝きを放っているかに見えた。辺りに行く人も少なく、区画された広大な住宅地が、より一層広大な秩序空間として広がっているような印象を私に与えた。コースを変えてみると、やはりこれまで気づかなかったような発見があるものである。

「オランダの家はお洒落で可愛いものが多い」ということを耳にすることがあったが、これまでの私はそのような気持ちに満たされたことはほとんどない。確かに、お洒落で可愛い家は時折見かけるが、そうした家は日本でも探せばいくらでもあると思っていたのだ。

しかし、今日のランニングコースを通った住宅地には、思わずランニングの足を止めてしまうぐらいの洒落た家が数多く並んでいたのである。それらの家が黄金色の太陽に照らされ、幻想的な雰囲気を生み出していた。

ランニングと共に移り変わる幻想的な景色の中で、これは別種の夢なのかもしれないと思わされた。フローニンゲンでの日々の生活には、どうしても夢であるかのような性質が常にまわりついている。この異国の街で自分の仕事を真に深めていくとき、この街が夢ではなく、現実のものとして自分の目の前に広がっていくことを願う。

ランニングの終盤、知識と実践に関する問題について考えを巡らせていた。どうやら実践力というものは本来、確固とした知識に裏打ちされたものであることが、見落とされているような気がするのである。実際に私が優れた実践者だと思う人は皆、堅牢な知識の体系を獲得している。

最初のキャリアを含め、これまで経営コンサルティングやコーチングなどに携わってきたが、やはり理論的な知識がなければ、高度な実践力を発揮することはできないことを痛感している。学術的な概念や理論は、時に軽んじられることがあるが、それらの概念や理論は、無数の経験的事象から導き出された固有の視点を私たちに提供してくれる。

そうした視点を取り入れながら、実践をより充実したものにしていく必要があると思うのだが、そもそもそうした知識を取り入れぬまま実践を継続させるような傾向があるように思える。もちろん過剰に知識を強調するあまり、そこに何らの実践も伴わないのであれば本末転倒である。

米国と欧州の大学院で学ぶにつれ、日本社会にはどうも学術的な知識を軽んじる傾向が見え隠れしているような気がしてならない。実際に、日本で博士号を取得した者に職がないというようなことが問題になっていたり、単純に金銭面で評価するのも気が引けるが、学部卒と修士卒の新入社員の給与がほとんど変わらないようなことが見受けられる。この話を欧米出身——実際には他のアジア諸国も含む——の友人にすると、いつも決まって信じてもらえない。

卓越性研究で有名なスコット・カウフマンは、卓越性や創造性に関する発達段階モデルを提唱している。このモデルは四つの段階から構成されており、下からMini-c, Little-c, Pro-c, Big-Cという段階がある。

この段階モデルについて、一つ一つここでは詳しく説明しないが、修士課程や博士課程を修了したての者は、せいぜいLittle-c段階の卓越性を持っているにすぎない。しかし、Little-cの段階はもはやその道の素人ではなく、立派な専門家であることに違いはないのだ。

専門家を正しく評価する枠組みが欠如していたり、専門家と素人の違いが分かる目を持っていないのが、日本社会の特徴として浮かび上がっているような気がしている。日本社会では、多様な領域で専門家と素人が一緒くたにされてしまっており、これは専門家にとっても素人にとっても非常に不幸である。

正当に評価される場所に身を置き、より高度な卓越性の境地に自分を後押ししてくれる環境に身を置くというのはとても自然なことのように思える、という考えに基づいて、今の自分はフローニンゲン大学にいるのだろう。今の自分にできるのは高度な実践力を獲得するためにも、既存の実践力に磨きをかけるためにも、強固な知識基盤を少しずつ確実に積み上げていくことなのだと思う。

458. 実践知について

全ての仕事がひと段落し、再び「実践知」と呼ばれるものについて考えていた。ここでふと、先日久しぶりにやり取りをしていたオットー・ラスキー博士の研究を思い出していた。

ラスキー博士に師事をしていた頃、彼の認知的発達段階モデルは非常に難解ながらも、最も関心を引く探究テーマであった。特に当時は、彼が提唱した「弁証法思考の28個の思考形態」について熱心に彼から学んでいたように思う。

ただ、当時を振り返ってみると、一つだけあまり注目をしていなかったテーマがある。それは「探求システム」の発達に関するラスキー博士の研究であった。

その研究では、ラスキー博士は過去の偉大な哲学者の思考形態を参照しながら、「ロック派探求システム」「カント派探求システム」「ヘーゲル派探求システム」の順番に、世界を探求していく思考システムが深まっていくことを指摘していた。

それらの探求システムの段階は、順番に簡単に述べると、対象を理解し知識を獲得する段階、対象に理性を働かせて知識を深める段階、弁証法的な高度な思考形態を用いて知識を結晶化させる段階となる。こうしたことを思い出しながら、まさにラスキー博士が探求システムの最後の段階に掲げていたものが「実践知 (practical wisdom)」と呼ばれるものであることに今更ながら気づいたのである。

この気づきをきっかけに、さらにラスキー博士との興味深いやり取りを思い出した。ラスキー博士曰く、「現代社会のほとんどの成人は『ロック派探求システム』ですらも獲得できていない」と述べていた。私が日常「実践」という言葉を安易に強調できないのは、ラスキー博士のこうした指摘が影にあるように思う。

つまり、ラスキー博士は「実践ということを強調する前に、その前段階の探求システムを確固たるものにしていく必要がある」という警鐘を、言葉にはせずとも私に投げかけていたように思えるのだ。

その後、ラスキー博士が「ロック派探求システム」と呼んでいたものの性質を探究してみると、ロバート・キーガンの発達モデルでいう発達段階4や、カレン・キッチナーとパトリシア・キングの内省力発達モデルでいうところの段階4に該当していることがわかり、確かに成人の多くはロック派探求システムですら獲得していないというのうなづける。

多くの成人がこうした探求システムを獲得できていない背景として、「実践」という言葉を安易に強調する風潮や知識の重要性を軽んじる傾向があると思うのだ。実践知に至るためには、経験を深く省察することが不可欠なのだが、そのための道具や視点として、知識が必須の要素となるのである。

学術的な概念や理論は、それだけでは確かに血の通わない飾り物に過ぎないが、それは様々な経験事象が結晶化された末に生み出されたものである、という特質があることを忘れてはならない。そして、私たちが概念や理論などの知識を習得し、その知識が内包する経験事象をこちらから解凍するとき、その知識は実践を深めてくれる極めて貴重な資源になると思うのだ。

実際に、私も学術的な概念や理論を学ぶことによって、自分の実践を見直すことがいかに多いことか。人財育成コーチングにせよオンラインラーニングにせよ、学術的な先行研究やそれを基にした理論から、実に多くのことを学び、それが自分の実践力を高めることにつながっているのを日々実感している。

以前、「コンサルタントやコーチで言葉の力がない人を多く見かけますが、そういう人には仕事を依頼しないようにしている」ということを共有してくれた知人がいる。どちらの職種にも携わっている私にとっては、耳の痛い話であるが、正鵠を射ていると思う。

本来言葉を扱う専門家であるコンサルタントやコーチが、そのような評価を下されるのはとても皮肉なことである。おそらくその方が見かけてきたコンサルタントやコーチは、概念や理論が持つ言葉の力を蔑ろにしてきたがために、そのような印象をクライアントに抱かせてしまったのだろう。

もちろん学術的な知識を鵜呑みにする形で学んでも意味はない。しかし、ラスキー博士が提唱した探求システムの発達モデルにあるように、まずは対象を理解するための知識を獲得することを経なければ、それ以上の思考形態を獲得することはできないのだ。ましてや、実践知などに至ることは到底不可能である。

そのため、知識を獲得する過程で、自分の経験に引き付ける形で解凍作業を自ら行っていくことが重要になるだろう。知識獲得と解凍作業の中で、自己の経験と実践が徐々に深まっていき、実践知として昇華されていくのだと思う。

思考形態の高度化に関する発達段階は飛ばすことができないため、やはり土台となる知識を獲得することは極めて大切なのである。そのようなことを改めて思わされた。

459. 光へ向かって

天空の雲間から朝日が差し込んできた。朝日と共に、早朝のフローニンゲンを包んでいた闇が徐々に姿を消していく。紅葉した木々に朝日が照らされる時、それは別種の輝きを私の眼に送り込んでくれる。

空を見上げると、渡り鳥たちが隊列をなして飛行していた。この隊列は、動的なシステムの産物であり、隊列の生成に「自己組織化」が関与していることに改めて思いを巡らせていた。隊列を指揮するリーダーがいなくても、あのように有機的かつ動的にフォーメーションが生成される姿には、思わず見とれてしまうものがある。

あれはドイツのリアーからハノーファーに向かう列車の中であったか。リアーからハノーファーへと向かう列車の車窓から、一つの古城が見えた時、自分に残された生の絶対量について、私は思いを巡らせていた。

未だ何ら仕事らしい仕事を残せていない自分を振り返りながら、残りの人生の長さについて考えさせられていたのだ。車窓から見えるあの古城のような仕事を残す日が、果たして自分にやってくるのだろうか、そのようなことを思っていた。

目に見える形の仕事を残せていないだけではなく、現在取り掛かっている仕事の進め方や態度についても考えさせられていたのだ。自分の仕事の足取りを毎日書き留めるようになって気づいていたのは、その絶対量の不足であった。このペースで仕事を進めていった時、自分の生が終わるであろう時までには、微々たる絶対量の仕事しか成しえないことに気づかされたのだ。

もう少しで誕生日という日がやってくる。奇しくもその日は、オランダ語のクラスの最終日である。太陰暦に沿った時間軸を生きなくなってから四年が経ち、自分の年齢を徐々に忘れ始めている。

そのため年齢を聞かれると、それが即座に出てこないため、計算を挟むようになってしまった。いくら自分の年齢を忘れたところで、必ず生が終わる時が来るというのもわかっている。その時までには、私は自分の仕事をどれだけ前に進めることができているのだろうか。

あの古城が暗示していたものは、こうしたことに気づかせることにあったのだろうか。私は誰からも注目されることなく、それでも仕事を進め続けていった人間たちを知っている。

そうした人間たちの生き様に、私はいつも激しく感化される。同時代人から評価を受けることがなくても、時代の光に照らされることがなくても、私は自分の仕事を愚直に続けたいと思う。その先に自分を照らす内側の光があるはずなのだ。

460. 自己を研究対象とすることについて

これまで発達研究で気になっていたことが一つある。それは、研究者が自分自身を研究対象にする可能性についてだ。研究者が自分自身を研究対象とした場合、方法論上様々な問題を解決しないといけないと思うのだが、人間の発達プロセスとメカニズムを研究することに関して、これは一つ面白いアプローチだと思う。

近年の発達科学の研究では、発達のプロセスに着目することが重要であるという考え方が浸透しつつある。変化のプロセスを追いかけることは確かに大事なのだが、実際には、継続的にデータを集めることが難しいという研究上の課題を残している。

仮に発達のプロセスに着目せず、ある支援策の効果を実証したい場合には、その策を導入する前後で測定を行えば事足りることが多い。しかしながら、発達のプロセスを観察しようと思うと、データを連続的に収集していく必要がある。

このような課題を乗り越えなければ、発達過程で何が起きているのかを把握することができない。現在私が取り掛かっている研究の場合、例えばオンラインクラスの一回分の対話を分析すれば、そのクラスの中でどのようなことが起きているのかを把握することができる。

これは一回分のクラスを一つの全体とみなし、クラスという一つの大きな学習プロセスを観察していくという方法である。今回の研究で用いるデータは、自分が過去に行ってきたオンラインクラスが元になっている。その観点からすれば、今回の研究も自分自身を研究対象としていると言えなくもない。

しかし、ここでは私以外にも学習者の存在があるため、完全に自分自身を研究対象としているわけではないのだ。発達科学の研究を眺めてみると、例えばジャン・ピアジェは、自分の子供たちを研究対象にして、独自の発達理論を組み立てて行ったという歴史がある。

また、ダイナミックシステム理論を発達科学に適用した先駆者であるポール・ヴァン・ギアートも、自分の子供の言語習得過程を研究対象にして博士論文を書き上げている。このように自分に近い人物を研究対象としている研究を見かけることは稀にあるが、完全に自分自身を研究対象にしているものはあまり見かけたことがない。

例えば、アイデンティティの発達研究では長期的にデータを得ることが一般的には難しい。だが仮に自分を研究対象とすれば、継続的にデータを収集していくことは比較的容易なのではないかと思われる。

今の私は表立った研究プロジェクトに加え、自己の変化の過程を観察するという試みにも従事していると思う。もちろん自分の中の様々な点を観察しようとしているのだが、大きく分けると、自分の視点の変化、価値体系や思想体系の変化、関心テーマの変遷、テーマごとの理解度の変化などである。

気づけば毎日、これらの点に関して何かしらの文章を書き留めている。これはいつになるかわからないが、将来、ここで書き留めた日記を材料にして、自分の発達過程を分析してみたいと思う。

日々の日記は、自分の変化の変遷を表すものであり、自分の発達過程を分析する上での重要なデータになるのではないかと思うのだ。

だが、データを収集するために日々文章を書き留めているわけではないので、その辺りは本末転倒にならないようにしたい。あくまでも日々の日記は、変化の過程を文字として表出することにより、絶えず変化のプロセスを意識しながら生きて行くためのものである、と言っても過言ではない。

時々過去の日記を振り返ると、自分がどのような観点に立脚して意味を作っているのか、世界をどのように眺めているのかを冷静に捉えることができる。その中で、自分の視点の盲点や関心テーマの移り変わりなどにも気づくことができる。

ある意味、日記を振り返るという作業は、盲目的に信奉している世界観を引き剥がすことに似ている。何か文字が刻まれる瞬間、そこには自己が同着しているものが姿を現すのだ。それは視点や観点、あるいは価値観や思想かもしれない。

いずれにせよ、主体が何かしらの文章を生み出すとき、それは必ず自己が同着しているものから生み出されるのだ。アイデンティティは「自己同一性」と訳されるように、自己が自分と何かを同一視 (identify) していることを示している。

その何かを特定しなければ、アイデンティティの成熟は起こりにくいだろう。なぜなら、ロバート・キーガンが提唱するように、自己が主体から客体へ移行していく際には、必ず主体を客体化するという作業が不可欠になるからである。

そうしたことを考えると、自分の内面を対象に日々文章を書き、それを定期的に読み返すことは、自己がどのようなものと同着しているのかを発見する貴重な手がかりになるかもしれないと思うのだ。さらには、同着しているものを特定することのみならず、自己の内面を対象に文章を書くということは、同着しているものから自己を引き剥がす作用も生み出しているように思う。

自己同着からの脱却が起こっているがゆえに、内面に関する文章を綴れば綴るだけ、内側で自己展開が起こるのだ。これは非常に気長な試みであるが、自己の成長・発達の過程を追うことによって、そのメカニズムを探っていくという実践を今後も愚直に継続させていきたい。